

## 令和7年7月 教育委員会定例会（意見交換）

開催日時：令和7年7月22日（火）

テーマ：①確かな学力について

②第3期近江八幡市教育大綱において本市が目指す学力とは

### 【意見交換等】

○教育長

第3期の近江八幡市教育大綱の策定について、従来から意見交換をさせていただいているが、いよいよ次の総合教育会議においては、教育大綱の素案が示される段階であると考えている。それを控えて、現時点において、委員の皆様には「これが大切だ」、「このようにしたら良い」というようなことがあれば、意見交換をさせていただきたいと思うので、自由にご発言をお願いしたい。

○教育長

それでは、私の方から考えていることを発言させていただく。

全国的な出生数の減少と不登校等の課題を抱えた児童生徒数の増加について、本市においてもやはり縮図として見える。子どもたちの生き抜く力が育っているかということ、教育大綱や教育振興基本計画に基づき長年にわたって取り組んできたにもかかわらず、明確な手応えということ、なかなか難しい状況がある。今回の教育大綱を改定するに当たっては、そのあたりのパラダイム転換を図るような議論が必要ではないかと、私としては考えている。

特に、子どもの居場所について、教育分野だけではなく福祉分野においても、いろいろな分野においても、子どもの居場所を確保しようとしてきたが、その子どもの居場所に中身が伴っているのか。子どもたちが、従来は家庭や地域にしっかりと居場所があったときには、自分たちが子どもとして経験できたようなことが、今我々が用意している居場所に、そのような教育効果が本当にあるのか。そういうものがない中で、緊急避難的に居場所を作っているとしたら、子どもたちが本来体験すべきそういったものが体験できずに、その居場所で時を過ごしているのではないかと。そういうことも、我々が教育現場で抱えている子どもの課題に関連しているのではないかと。その因果関係は明確ではないと思うが、そういったことにも思いを致した教育大綱にしていく必要があるのではないかと考えている。委員の皆様のお考えがあれば、お聞かせいただければと思う。それ以外でも結構なので、よろしくお願ひしたい。

○教育長

学びに向かう力、これは、どれぐらい取り組んでいるか。10年ぐらい取り組んでいるのか。5～6年程度か。

○学校教育課

滋賀県では、幼保小接続の観点から「学びに向かう力推進事業」という形で取り組んでおられるが、国においては、実際にその「学びに向かう」というのは、接続の視点だけではなく、本来子どもたちが学びに向かうということに関しては、20年ぐらい前から既に取り組んで来られていて、「学びから逃走する子どもたち」というような言葉がはやった時期もあった。そのことを踏まえると、学びに向かえない子どもたちが増えているという現状は、20数年ぐらい前からは、全国的に話題になっているという状況である。

○教育長

全国的に子どもの出生率が減ってきている10年間に、不登校等の課題を抱えている児童生徒数の総数は22万ぐらい増えている。10万人ぐらいだったものが30万人ぐらいになっている。30万人減って30万人増えているという状況があって、これは、本県のやってきた接続の取組の話に焦点を当てても、本市でも答えが出ていないということであると思う。

「確かな学力」という言葉があり、何か偏差値が高くなるようなことに捉えられがちだと思うが、一般的には各教科のいわゆる評価と考えられ、そのように取り組んできたと思う。その「学力」や「学び」というものの目標があまりにも限定的である。又は、「学びに向かう力」というところにおけるその目標というのは、今課題にしている生き抜く力の創生のようなレベルのものを目標に置いていないという現実があるのではないかと思う。

教育大綱の改訂に当たって、本市においては、例えば「学力」というものを「生き抜く力、課題発見能力、課題解決能力、そのようなものこそが本来の学力である」、「そういう学力を本市においては目指すのだ」というような議論が私としては必要かなと思う。

そのようなことも含めて、ご意見頂戴できればと思う。

○重森委員

確かな学力というと、とても難しいと思うが、何か「学力」と言ってしまうと、やはり「勉強がどれだけできるか」という形に捉えられがちであると思う。教育長のお話を聞きながら「どうなってほしいか」と思ったときに、何か「今よりも自分らしく、しなやかに輝いて生きていこう」と思える力がそれぞれが持てたら良いなと思った。やはり勉強だけの物差しで計られるのではなく、物差しを替えても良いし、いろいろな物差しの場で頑張れる自分

がいるということが、社会の自然かなと思う。勉強だけに焦点が当たり過ぎてしまうことで、しんどくなっているのではないか。

○教育長

例えば、今のうちから課題発見能力や課題解決能力というと、何か鋭い感じがして、全てのあらゆる子どもたちが、そういうものを目指せるのかという疑問である。それをもう少し柔らかい言葉で言うと、わくわくドキドキして、何かに興味を持つ。何かと何かの違いを見つけるとか、そういうきっかけを持って、少しでも今の自分よりも成長できるそういう機会を提供する。そういう教育であった方が良いということで、言葉を置き換えられるかもしれない。

○重森委員

自分らしさというものを失ってほしくないと思う。

○西田委員

私も確かな学力というと、「学力」というところが少し引っかかっていることもあって、やはり「学力」と言われるとイメージ的にそれこそテストの点数のような話になってしまうので、そこも当然大事だが、プラスで課題発見能力であったり、問題解決能力であったり、人間力であったり、そういうことを「学力」という言葉で括ってしまっても良いのかという思いがある。確かに文字としては「学力」で良いかもしれないが、読み方を変えた方が、「勉強だけではないよ」、「テストの点数だけではないよ」というニュアンスも組み入れられるのではないかと思う。おそらく教育大綱にも「確かな学力」という文言が入ってくるのかも知れないが、そこに片仮名で「チカラ」と読ますような形で書いてはどうかと思う。

○教育長

前回大更委員の方から、総合教育会議に臨むに当たっては、教育委員会として大きな部分を共有した方が良いのではないかという話があったので、そういう場を持たせていただいた。また、毎回この教育委員会定例会でも意見交換を重ねてきた。今日頂戴したことも共有しながら、次回の総合教育会議に臨みたいと思う。